

ものであると言えよう。ゆえに、その要素をできるだけ厳密に判別することは、祈祷をめぐる内的に生起するプロセスをオリゲネスがどのように理解していたのかを知るために有用である。

ゆえに本稿は、オリゲネスが人間の魂についてどのように理解していたのかを、その歩む過程と魂そのものの内容について、彼の神学思想が体系的によく表れている『諸原理について』を主たるテキストとして用いながら考察し、論じる。

1. 魂のプロセス

魂を持つとされる人間は、この世を生きている。この世について、オリゲネスは、その実体が「不滅であり、不死である」⁽⁷⁾ 魂の訓練と魂を助ける者たちのために造られたと理解していた⁽⁸⁾。つまり、この世での生は、しばしば指摘されるように、魂の教育期間の一過程と捉えられている⁽⁹⁾。

では、教育を必要とされる魂とはいかなるものなのか。また、なぜあるいはどのような教育が魂に必要なのか。

オリゲネスによると、魂は最初から「魂」であったわけではなく、また無数に存在するのでもなく、限定された数だけ創造された理性的被造物 (*rationabilis creatura*) であった⁽¹⁰⁾。これは「精神」(*mens*) と呼ばれているものでもあり、物質の身体を持たず、理性 (*logos*) を付与され、神を観想する性質を与えられた、純一知的存在 (*intellectualis natura simplex*) とも呼ばれる⁽¹¹⁾。被造物であるため神と永遠に共存するものではなかったが⁽¹²⁾、しかし魂に先立って存在するものであった。それらは、すべて等しくかつ同様のものとして造られ⁽¹³⁾、個人の自由意志をとおして、統合された集合の一部と

2004, pp.59r-62l.

(7) PA IV, 4, 9 (Görgemanns-Karpp362, 10-11): "dubio et immortalis". 魂の不死性に関してはほかの箇所にも多く言及されている。

(8) PA III, 5, 4 (Görgemanns-Karpp275, 20-23).

(9) Cf.A.Tripolitis, *The Doctrine of the Soul in the Thought of Plotinos and Origen*, NewYork 1978, p.143.

(10) Cf.PA II, 9, 1 (Görgemanns-Karpp164, 10-11). なお、理性的被造物が定数であったという叙述の一方で、魂が無数に存在する (PA III, 1, 14 [Görgemanns-Karpp512, 8/512, 19]) という叙述も見られるが、これは定数の霊が何度も魂として生き直すためであることが考えられる。

(11) PA I, 1, 6 (Görgemanns-Karpp21, 11); ComJon I, 20ff. CC IV, 14.

(12) トリポリティスはロギガが永遠から存在しているとの主張をオリゲネスの考えとして述べているが、その根拠としては、神の善行と統治を続け、神の力が活動しなかった時があるとは考えられない (PA I, 4, 3 [Görgemanns-Karpp66, 3-5]) ということが挙げられる。また、ロギガが神の思考として、また、神の精神とロゴスである神の知恵における永遠の形ないしはイデアとして存在したと説明されている。 (PA I, 4, 5 [Görgemanns-Karpp67, 20-68, 3]; PA I, 2, 2 [Görgemanns-Karpp30, 4-6]; CC V, 22, 29). しかしわれわれはその見解に反して、明らかにそれらには存在しなかったときがあったと考えられていることを指摘したい。 Cf.PA II, 9, 2 (Görgemanns-Karpp165, 17-19): "Verum quoniam rationabiles istae naturae, quas in initio factas supra diximus, factae sunt cum ante non essent, hoc ipso, quia non errant et esse coeuerunt, necessario convertibiles et mutabiles substiterunt,..."

(13) PA II, 9, 6 (Görgemanns-Karpp169, 25-28).

しておのおの神を観想していた⁽¹⁴⁾。彼らは与えられた存在であるゆえ、取り去られることも、失われることもあり得る。失われる原因は心 (animus) の動きが正しく適切な方向に進んでいないことにある⁽¹⁵⁾。

事実、彼らが観想から向きを変えたため、「精神が自らの状態と品位からはずれて魂とな」った⁽¹⁶⁾。ここでオリゲネスは「魂」という呼称を、「義人に固有な熱火から、神的火の参与から冷えきった」⁽¹⁷⁾状態に基づいて与えられたものであると推測し、この魂を、「弱い肉とはやる霊との中間に位置するもの」と理解している⁽¹⁸⁾。

そのような墮落の原因は何なのか。

オリゲネスは「怠慢 (neglegentia) から生じたこの背反と墮落」⁽¹⁹⁾と述べており、具体的な例を用い、怠慢がこの原因として挙げられている理由を説明する。すなわち、ある知識や技術を習得した場合、実践をやめることによってそれらは忘れられ、やがては失われてしまうように、理性的被造物も本来の自分に留まるべく精励することが必要だということである。

このことについてトリポリティスは、魂が自ら絶えず試みと罪に瀕し、生来的な不安定性と墮落への傾向を持つがゆえに、可視的な試みに満ちたものと不可視的な永遠のものとの間で動揺するというオリゲネスの理解を指摘し、理性的被造物の魂への墮落の原因を、彼らの生前からの可変性、つまり悪に墮ちるといった間違った選択をさせる彼らの怠惰性ないしは怠慢性として説明している⁽²⁰⁾。理性的被造物の怠惰性、怠慢性には、墮落する必然性がそのときすでに含まれているのであり、墮落は彼らの遺伝的な不安定性と無知からの避け得ない結果である⁽²¹⁾。そしてこれらのことから彼は、理性的被造物においては選択の完全な自由によって墮落が引き起こされるとするコッホ⁽²²⁾の主張に反論する⁽²³⁾。トリポリティスは、このように、怠惰性ないしは怠慢性という性質を理由に、もはやそれ以外を選べないとする選択の不自由さを人間のうちに指摘する。

しかし、オリゲネスは、理性的被造物に自由意志が与えられていることを述べるな

(14) ComJon1, 92.

(15) PA II, 9, 2 (Görgemanns-Karpp165, 22-24). なお、ここにおける "animus" という語を小高は「精神」と訳しているが、精神は "mens" の訳語でもあり、"mens" と "animus" は同じものを意味しないため、ここでは混同を避けるため、"animus" にほかの適切な訳語として、「心」の語を充てた。

(16) PA II, 8, 3 (Görgemanns-Karpp158, 23-24): "mens de stau ac dignitate sua declinans effecta vel nuncupata est anima".

(17) PA II, 8, 3 (Görgemanns-Karpp158, 18-19): "ab eo quod refrixerit a fervor iustorum et divini ignis participatione".

(18) PA II, 8, 4 (Görgemanns-Karpp162, 20-21): "medium ...esse anima inter carnem infirmam et spiritum promptum".

(19) PA I, 4, 1 (Görgemanns-Karpp 63, 10-11): "...autem istam deminutionem vel lapsum eorum, qui se neglegentius egerint,...".

(20) A.Tripolitis, op.cit., p.95.

(21) Ibid., p.143.

(22) H.Koch, *Pronoia und Paideusis*, Berlin 1932, pp.117ff.

(23) A.Tripolitis, op.cit., p.95.

かで、「その意志の自由が各々を、あるいは神を模倣することによって進歩させ、あるいは怠惰によって後退させ」、それが「理性的被造物の相違の原因となった」と説明している⁽²⁴⁾。つまり、たとえ自己のうちに怠惰を有していようと、模倣か怠惰か、それを選ぶ余地はあるということになる。さらには、自由意志を論じるなかで、オリゲネスは人間のなかにある理性が善悪を識別し、判別し、承認したことを選ぶ能力を持っていると明言している⁽²⁵⁾。これらのことからわれわれは、理性的被造物は怠惰性を纏いながらも選択の自由を保有し、それゆえに、選択の結果を負わなければならないという考えを、オリゲネスに指摘したい。

堕ちて魂となった理性的被造物は、もはや互いに等しいものではなく多様性を持つものとなり、各々の墮落の重さに相応しい身体を付与され、この世に生を受けた。この世で魂は、様々な霊の働きかけを受ける⁽²⁶⁾。この働きかける様々な霊に力に機会を与えるのは怠惰 (*ignavia*) であり⁽²⁷⁾、オリゲネスはこれに対して人間のとるべき態度も示す。それはすなわち、われわれの魂のところに来た神からの霊を歓迎し、受け入れ、その霊に自らを委ねる、ということである⁽²⁸⁾。

オリゲネスは、そのような霊の働きかけが様々である原因を、与えられる身体が多様性がそうであったように、この世に誕生する以前、今生でなく前世に遡るものと考えている⁽²⁹⁾。つまり、生涯のなかで自己に降りかかる個人的な誕生の状況や状態は、人間として存在する以前の状態の魂の態度に依拠するものなのである⁽³⁰⁾。同時に、はっきりと、その相違は創造主の意志でも決定でもなく、各自の自由な決断にあると述べられている⁽³¹⁾。ゆえに、神は功績に応じて被造物を配慮するのが公平であると考え⁽³²⁾、摂理のなかで各々をその行動や心 (*animus*) の多様性に応じて配慮される⁽³³⁾。

(24) PA II, 9, 6 (Görgemanns-Karpp169, 28-170, 32): "Verum quoniam rationabiles ipsae creaturae, sicut frequenter ostendimus et in loco suo nihilominus ostendemus, arbitrii liberi facultate donatae sunt, libertas unumquemque voluntatis suae vel ad profectum per imitationem dei provocavit vel ad defectum per negligentiam traxit".

(25) PA III, 1, 3 (Görgemanns-Karpp197, 29-31); III, 1, 5 (Görgemanns-Karpp201, 2-6; 201, 20-23); III, 1, 20 (235, 5-8; 21-22).

なお、"Alioquin contrarium esset dari nobis man data, ex quorum vel observatione salvemur vel praevaricatione damnemur, si observandi ea facultas in nobis non est". (PA III, 1, 6 [Görgemanns-Karpp204, 22-25]) との叙述は選択能力を有するという説を裏付けるものであるが、ルフィヌスの付加によるものであるから、ここでは考察の対象としない。

(26) PA III, 3, 4 (Görgemanns-Karpp260, 15-17).

(27) PA III, 3, 6 (Görgemanns-Karpp262, 24-26). 「怠惰」(*ignavia*) は前出の「怠慢」(*neglegentia*) とは異なり、その意味から、行動自身体でなく、その起源となる心的状態を表す。

(28) PA III, 3, 6 (Görgemanns-Karpp263, 3-6).

(29) Cf. PA III, 3, 5 (Görgemanns-Karpp262, 6-8); PA III 3, 6 (Görgemanns-Karpp262, 19-22).

(30) Cf. PA III, 1, 24 (Görgemanns-Karpp1-3; 244, 5-8).

(31) PA II, 9, 6 (Görgemanns-Karpp170, 3-5).

(32) しかし、功績の小ささが、この世での苦しみの大きさと単純に比例するということを意味するものではない。Cf. PA II, 9, 7 (Görgemanns-Karpp171, 15-18): "...cum tamen et aliqui ex his, qui melioribus meritis sunt, ad exornandum mundi statum 'conpati' reliquias et officium praebere inferioribus ordinentur, quo per hoc et

オリゲネスはこのように、それぞれの置かれた境遇を、偶然によるものとは考えず、被造物の魂の状態を配慮した神の摂理によるものであると考える。そのなかで、魂は学び、本来の状態に戻ることを期待され、神から教育を受ける。魂が救われる必要のあるものだからである。この、魂は自らの状態に最もふさわしい状況のなかで、学びを進める。学ぶのはまた、魂が本来の状態に戻る能力を持っているからであり、それは改められ、矯正されることによる⁽³⁴⁾。そしてこの能力ゆえに、人間は本来の状態に戻る責任を負っている⁽³⁵⁾。しかし同時に、すべての魂が神から教育を受けるということは、ここに、すべての魂の完成を願う神の意志もまた看取される⁽³⁶⁾。

オリゲネスはさらに、自分の魂が神に似せて創造されているということ、墮落前の状態に回復する運命にあるということ、そして別の身体で転生しないということ、人間は「学ばねばならない」と考えている⁽³⁷⁾。学ぶことによって理解が得られ⁽³⁸⁾、その知識が、神への似像性を有する本来の自分を認識し、そこに回帰する助けとなる。

そのような本来の自分に向け、可能な限り神に似たものとなることが人間にとっての最高善であるが、この神の似姿は、熱意をもって神を模倣することで獲得されるものと考えられている⁽³⁹⁾。彼によると、人間は神の似像性を有するゆえに、人間の努力と模倣とによってその徳が人間のうちにも存在し得るのであり⁽⁴⁰⁾、たとえ精神が墮落したとしても、精神に内在する、理解を回復するための種子のようなものによって、神の似姿を回復し得るのである⁽⁴¹⁾。

この世で一定期間を過ごし、この世での生を終えた魂は、やがて「霊的身体」(spiritalis corpus) に復活する。オリゲネスは、それが聖書の中で形態を持つ「身体」として言及されていることを強調する⁽⁴²⁾。そのさいの身体の多様性は、現世を過ごした魂のあり方によって異なる⁽⁴³⁾。そして、「内在原理」(insita ratio)⁽⁴⁴⁾によってこの魂的身

ipsi participes existant patientiae creatoris,..."

(33) PA II, 9, 6 (Görgemanns-Karpp170, 5-17); PA IV 4, 9 (Görgemanns-Karpp362, 17-363, 3).

(34) Cf. PA II, 8, 3 (Görgemanns-Karpp155, 7-161, 22).

(35) Cf. T. Mikoda, HEGEMONIKON IN THE SOUL, *Origeniana Sexta*, Louvain/Belgium, 2001, p.461.

(36) Cf. PA III, 1, 17 (Görgemanns-Karpp228, 17-20).

(37) Cf. R. Roukema, "souls", ed. by McGuckin, *The Westminster Handbook to Origen*, Louisville/London 2004, pp.2011-202r.

(38) Cf. PA I, 1, 6 (Görgemanns-Karpp23, 5-10).

(39) PA III, 6, 1 (Görgemanns-Karpp280, 13-14).

(40) PA IV, 4, 10 (Görgemanns-Karpp363, 20-24).

(41) PA IV, 4, 9 (Görgemanns-Karpp363, 7-9): "...etiamsi per neglegentiam decidat mens ne pure et integre in se recipiat deum, semper tamen habeat in se velut semina quaedam reparandi ac revocandi melioris intellectus,..."

(42) Cf. PA II, 10, 1-2 (Görgemanns-Karpp173, 14-174, 16).

(43) PA II, 10, 8 (Görgemanns-Karpp182, 4-8): "...sancti corpora sua, in quibus sancte et pure in huius vitae habitatione vixerunt, lucida et gloriosa ex resurrectione suscipient, ita et impii quique, qui in hac vita errorum tenebras et noctem ignorantiae dilexerunt, obscuris et atris post resurrectionem corporibus induantur,..."

(44) PA II, 10, 3 (Görgemanns-Karpp176, 5-6).

体 (spiritale anima) は霊的身体へと変化する⁽⁴⁵⁾。

オリゲネスはさらに、「どのような者が刑罰を受けたり、安息及び至福に至ったりするのか知るため」⁽⁴⁶⁾に、この復活と審判を関連づけて説明している。魂が悪行と多くの罪とを自らのうちに集積したとき、その集積が責め具となり「罰」となって燃え上がる⁽⁴⁷⁾。同時に、精神 (mens)⁽⁴⁸⁾もまた、神の力によって自らの悪業を思い出し、卑劣な行為や不敬虔な行いと向き合わざるを得なくなる。そのさい、良心は自らの呵責によって痛み、自身を非難し、自身の罪の証人となる⁽⁴⁹⁾。オリゲネスはこの痛みを、罪の有害な欲 (affectus) から生じるものと理解している。身体が本来の状態から遠ざかると痛みを感じるように、魂も神による秩序や調和から遠ざかると、自ら担う不調和を罰及び呵責として耐え、自らの不秩序を苦罰として感じる。神は魂の健康を失った者には火による罰を加え、それによって、魂は強固となる⁽⁵⁰⁾。ここにはまた、これらの魂の苦痛には魂の浄化が意図されているのであり、魂をヌースという本来の状態に戻すためのものであるとするオリゲネスの考えが指摘される⁽⁵¹⁾。

以上のような過程を、魂は幾つもの世々を生きるあいだに経験するとオリゲネスは考えている⁽⁵²⁾。今生はその幾つもの世々のうちのひとつである⁽⁵³⁾。現世で自分を浄める者とそうでない者にはそれぞれ、善のわざ、あるいは卑しい器としての来世が与えられる⁽⁵⁴⁾。回避は不可能であるから、現世を浄めの機会として用いなければならない⁽⁵⁵⁾。

ただし、転生に関してキリスト教信仰と相容れない考え、すなわち、人間の魂が獣や鳥や魚のなかにあったこと、あるいはいつか非理性的な動物に生まれ変わるということなどは明らかに拒絶されると同時に、現在の世界の時代においてではなく、次の世界の次の時代において、再び堕ちて別の身体を受けるという考えを、リュウケマは

(45) PA II, 10, 3 (Görgemanns-Karpp175, 13-18; 176, 5-6). 「内在原理」という考えは、ストア派に由来することが指摘される。Görgemanns-Karpp, op.cit., p.425, n.9.

(46) PA II, 10, 1 (Görgemanns-Karpp173, 6-7): "ut sciamus quid est illud quod vel ad supplicium vel ad requiem ac beatitudinem veniet".

(47) PA II, 10, 4 (Görgemanns-Karpp177, 15-18).

(48) ここでは、精神は良心とも同一視されている。Cf. PA II, 10, 4 (Görgemanns-Karpp178, 4): "...mens ipsa vel conscientia".

(49) PA II, 10, 4 (Görgemanns-Karpp178, 8-9).

(50) PA II, 10, 6 (Görgemanns-Karpp179, 1-11).

(51) R.Roukema, "Souls", ed. by McGuckin, op.cit., pp.2011-202r. また、ノリスは、『ケルスス駁論』においても、地獄という考え方を無知の教えのための特別な意味を持つものとするオリゲネスの叙述が見られることを指摘している。F.W.Norris, op.cit., pp.59r-62l.

(52) Cf. Isa.66, 22; .Eccles.1, 9-10.

(53) PA III, 5, 3 (Görgemanns-Karpp273, 2-4); PA II, 1, 3 (Görgemanns-Karpp290, 7-8).

(54) PA II, 9, 8 (Görgemanns-Karpp172, 10-12).

(55) 「現世での生活の間に清められずに復活に到った人々」 ("qui in hac vita non expurgati ad resurrectionem veniunt, id est peccatores": PA II, 10, 2 [Görgemanns-Karpp175, 5-6]) をオリゲネスは「即ち罪人」と呼んでいる。

(56) Cf. R.Roukema, op.cit., pp.205r-207r.

オリゲネスに指摘する⁽⁵⁶⁾。

オリゲネスにはたしかにそのような明確な論述が認められるが、小高は、オリゲネスの他の文書の内容を考慮すると、オリゲネスがこのルフィヌスによって翻訳されている内容ほどには魂が他の動物に生まれ変わるといふ考えを否定してはいなかったと述べている⁽⁵⁷⁾。

しかし少くとも、複数の世を生きると考えられていることは確かである。魂はこのようにいくつかの世界あるいは時代のなかで生き、訓練を受けることを繰り返し、しかし最後には、神の愛がその被造物のうちに神から墮ちる意向を克服し、普遍的な万物復興 (ἀποκατάστασις) にすべてを呼び戻す⁽⁵⁸⁾。これら全ての魂が浄化され、創造者と再結合するそのとき、可視的で物質的な宇宙は存在することをやめる。オリゲネスにはこのような最終的な救いと神への回帰の思想が指摘される⁽⁵⁹⁾。

以上、魂の始原から終末までの過程に関するオリゲネスの考えを提示したが、ここで言われている「魂」とは、それと類似した内容を指す「精神」とどのように区別され、どのような名称で換言され、いかなる機序で機能するのか。

2. オリゲネスの「魂」理解に関する先行研究から

魂に関する彼の考え方には初期ストア派の考えがしばしば指摘される⁽⁶⁰⁾。つまり、魂が、五感、言語能力、生殖能力、そして人間を主導する部分としてのヘーゲモニコン (ἡγεμονικόν)、という八つの部分から構成されている⁽⁶¹⁾、とする理解である。ここではこのうち魂の状態に大きく影響するヘーゲモニコンに焦点を当て、オリゲネスの理解への接近を試みる。

ヘーゲモニコンは、ルフィヌスとヒエロニムスによって "principale cordis" と羅訳されている。リースキーはそれを「魂の基盤」(Seelengrund) と独訳し、ロゴスとの出会いの場として理解している⁽⁶²⁾。そして、ヘーゲモニコンの最も興味深い働きとして、

(57) オリゲネス著、小高毅訳『諸原理について』、小高による解説の注、376頁。小高によると、ここで言及されているのはユスティニアヌスとヒエロニムスの著作 (Fr.17b ; Ep.124.4) である。

(58) PA II, 3, 5 (Görgemanns-Karpp120, 17-20); PE27, 15 (GCS3, 374, 9-13); ComRom V, 10, 13-16; VIII, 13, 10; Jerome, Epist.124, 3-14.

(59) Cf.F.W.Norris, op.cit., pp.59r-62l.

(60) Cf.W.Gessel, *Die Theologie des Gebetes nach>De Oratione<von Origenes*, München/Paderborn/Wien 1975, p.138.

(61) ゼノンは魂をヘーゲモニコンと五感、言語および生殖という八つの部分に分けたとされている。宇宙における太陽のようなヘーゲモニコンからは、タコの腕のように魂の七つの部分が生え身体へ通じており、(SVF I.143) その場所は頭のなかにも心臓部に (SVF II.879, 894) とも言われる。なお、ヘーゲモニコンについてランベは、「魂の主要部分、知性 intellect」と説明している。(G.W.H., Lampe. "ἡγεμονικόν", *A Patristic Greek Lexicon*, Oxford 1987⁸, 1961, p.600l.)

魂をロゴスと連携させ、魂がヘーゲモニコンのものとされているその宗教的意義を想起させる、ということを挙げている。また、ヘーゲモニコンが精神的あるいは宗教的な意味原理であり⁽⁶³⁾、ヌースとは異なって悪魔の試みと攻撃にさらされるものとして理解されていることを指摘している⁽⁶⁴⁾。

クルーゼルは、オリゲネスが魂を上下二層の構造によるものとして考えていること⁽⁶⁵⁾、その高次の要素をプラトンの言うヌースと理解し、「知性」(intellect)とも呼んでいることに言及する。そして、この高次の要素ヌースは、理性的被造物として先在する魂を構成していた、魂の源の部分を目指す⁽⁶⁶⁾。つまり、魂に墮ちる以前の理性的被造物は、ヌースが自らの全体を構成していたものであるということになる。なお、このヌースはストア派の用語においては「ヘーゲモニコン」に相当し⁽⁶⁷⁾、さらに聖書における用語としては「カルディア」(καρδιά)あるいは「コア」(cor)と表現され、「心」を意味することが指摘される。ここから、クルーゼルが、オリゲネスの思想のなかで「ヌース」と「インテレクト」と「ヘーゲモニコン」、そして「カルディア」を等しいものと理解し、魂となる前の理性的被造物全体を構成するものと考えていることがわかる。それらは、言葉である神の像において創造され、人間が神の像に与る根源である。神の似像性の再獲得もまた、魂が墮ちる前の本来的存在、ヌースとも呼ばれるヘーゲモニコンによって導かれる。ヘーゲモニコンは霊の最良の生徒であり、霊の導きのもと、道徳的かつ高德な器官であり、黙想と祈りの器官であると指摘される⁽⁶⁸⁾。

他方、低次の要素は、最初の墮罪以降に付け加えられたものであり⁽⁶⁹⁾、本能あるいは感情の源であり、プラトンによる魂の三分説⁽⁷⁰⁾のうちの低い二つである「スュモス」(θυμός)と「エプスミア」(ἐπιθυμία)として理解されていることが指摘される⁽⁷¹⁾。

(62) A.Lieske, *Die Theologie der Logosmystik bei Origenes*, Münster 1938, p.104.

(63) *Ibid.*, p.106.

(64) オリゲネスはヌースが錯乱する可能性を有することを示唆している。Cf., PE9, 1 (GCS318, 2): "ὅτι τοῦ μὴ ἐπιθολοῦσθαι τὸν νοῦν ὑπὸ ἐτέρων λογισμῶν πάντων ἐπιλελῆσθαι...".

(65) Cf. PA II, 10, 7 (Görgemanns-Karpp181, 14-17).

クルーゼルはさらに、それらが魂の異なる「構成要素」として理解されているのではなく、魂は異なる脈絡では異なって表現される唯一知的で霊的なリアリティであることを指摘している。H.Crouzel, *op.cit.*, pp.87-89.

(66) リューケマもまた同様に、ヌースが魂の本来の状態を指すことを述べている。Reukema, *op.cit.*, p.202r.

(67) クルーゼルは、ストアにおいてこの用語が "principale cordis", "principale mentis", "principale animae" とされており、すなわち支配或いは主要な能力を意味すると述べている。H.Crouzel, *op.cit.*, p.88.

(68) *Ibid.*, p.89.

(69) 墮落後にこの低次の要素が付加された理由を、クルーゼルは、人間の魂がこの身体のうちにある限り、善悪種々の霊の種々の働きかけを受けうるため (PA III, 3, 4.) と述べている。つまり試練を受けるため、と換言できよう。

(70) プラトンは魂を、魂の動的かつ非知的の根源であり、覇気や気概、また怒りを示す "ὁ θυμός" (G.W.H.Lampe, "ὁ θυμός", *op.cit.*, p.6571-r)、渴望、欲望、強欲を意味する "ἡ ἐπιθυμία" ("ἡ ἐπιθυμία", *ibid.*, p.5241-5251)、そして、理性的の三つに分類した。また用語としてもプラトン派のヌース(知性)、スュモス(怒り)、エプスミア(渴望)という三分説に対し、後者はプネウマ(魂)、プシュケー(魂)、ソーマ(身体)を意味し、直接的には対応しない。

とすると、プラトンの三分説の残り「理性」は「ヘーゲモニコン」を意味することになり、オリゲネスが上下二部分から成ると理解している魂は、結果的にプラトンの三分説の魂に対応することになっているといえる。

ゲッセルは、オリゲネスがヘーゲモニコンを魂の上部に据え、そこを神の像の所在として、観想と徳の器官、祈りの器官であるというクルーゼルの理解に賛意を示している。ただし彼はヘーゲモニコンを「理性」(Vernunft)、また先のリースキーがヘーゲモニコンとは異なるものとして扱ったヌースを「悟性」(Verstand)と独訳し、この点で先のクルーゼルと異なっている。

デュピュイは、オリゲネスがヘーゲモニコンを、ロゴスとも呼ばれるヌース(νοῦς)⁽⁷²⁾、ディアノイア(διάνοια)、ディアノエーティコン(διανοητικόν)⁽⁷³⁾、カルディア(καρδία)の四つを含むものとして理解していたと考える⁽⁷⁴⁾。クルーゼルに従えば、ディアノイアもディアノエーティコンも知的な活動に携わるものであり、ヌースもカルディアもヘーゲモニコンに等しいものであるから、これらが魂の上位のものに相当すると考えるデュピュイの説と齟齬はない。

三小田は、ゲッセル同様、魂の構成とその要素について、クルーゼルの見解に従い、オリゲネスが自由意志の力が働く場をヘーゲモニコンと考えていることを指摘する。ただしそれが魂の上部ではなく、上部と中部の中間に位置するものであると理解している⁽⁷⁵⁾。このことについて、三小田は下記のように述べている。

すなわち、ヘーゲモニコンはしばしば、魂の最も高次の機能を持つものとして、つまり神を見るものとして理解され、ヌースに等しいものとして考えられている。また、ロゴスの不可欠な伝達者と考えられている⁽⁷⁶⁾。神を模倣することは、実際にはロゴスすなわちキリストを模倣することを意味するため、ロゴスは神を模倣するために不可欠である⁽⁷⁷⁾。魂は、あらゆる段階において、進歩に応じて魂を照らすこのロゴスの助けを必要とする⁽⁷⁸⁾。ヘーゲモニコンは自由意志を与えられ、二者択一の選択能

(71) Ibid., pp.87-89; Rom.8, 6. なお、リュウケマの指摘にもあるように、オリゲネスはプラトンの三分説に時折ふれながらも、それが聖書を典拠としていないことにより、彼自身はそれに対して批判的である。R.Roukema, op.cit., pp.2011-202r. Cf. PA III, 4, 1 (Görgemanns-Karpp264, 7-11).

(72) FrgmLk120 (GCS49, 275, 5); ComJn II, 35 (GCS10, 94, 18f.)

(73) 『祈りについて』では、神に魂を向けて祈るダビデについて、それは悟性の目が主の栄光を映し出すように変えられ、大きな恩沢を得たのだと説明され(PE9, 2 [GCS318, 25-28]), 「祈っている者の悟性から出る光のように」("Φωτὶ εὐχομένῳ ἀνατέλλουσι ἀπὸ τῆς τοῦ εὐχομένου διανοίας..." PE12, 1 [GCS3, 324, 15-16].))という表現も見られる。つまり、悟性は神と関わることに關する器官であるため、明らかに魂の上部にあるものと理解されていることが推測される。

(74) ゲッセルはこの考えを古ストア派に指摘する。

(75) T.Mikoda, op.cit., pp.459-463.

(76) FrgmJn18, 2; HomJr5, 9.

(77) PA III, 6, 1 (Görgemanns-Karpp280, 22-281, 5); 4, 4, 9 (Görgemanns-Karpp363, 9-11); CC3, 28, 41; HomGn1, 15.

(78) 『雅歌講話』では、魂は、絶えずロゴスである花婿を見出し、失い、また回復する花嫁として理解され、

力を有していたために、常に動揺する。魂は、そのようなヘーゲモニコンの性質にしたがって、上昇と下降双方の方向性を有するのである。ヘーゲモニコンはその道程の終焉に向けて、霊的感覚によってロゴスの助けを受けながら、コースを決め、道を導く。

以上のように、三小田はほぼクルーゼルに等しく、オリゲネスがヘーゲモニコンを、神を見得る、魂において最高機能を持つものとして理解し、魂に歩みを教えるロゴスを伝達する働きを持つものとして考えていたことを提示する。そしてそれがヌースに等しいものであることも指摘していた。

このヘーゲモニコンは、ゲッセルとクルーゼルによれば、魂の上部に位置すると考えられていた。オリゲネスには「魂のすぐれた部分は神の像、似姿に従って造られたものと考えられねばならないが、他の部分は初めの清い状態の本性に背く自由意志の墮落によって、後に得たものと考えべきである。」⁽⁷⁹⁾との叙述が見られ、この上部を、ゲッセルとクルーゼルも述べているように、神の像の所在と理解することができる。ただ、これがヘーゲモニコンをさすものであるという具体的な叙述は見当たらない。しかし少くとも、始原に神に似せて創造された、つまり、魂が魂となる前のヌースの状態を指していることは考え得る。

ヌースについては、リースキーをのぞけば、理性とともにそれがロゴスとの出会いの場であるヘーゲモニコンを指すものであると理解されていた。またデュピュイは、ヌース以外の三つの要素をヘーゲモニコンに見ていることも明らかになった⁽⁸⁰⁾。

おわりに

以上、魂の歩むプロセスと、その魂そのものに関するオリゲネスの考えを、先行研究を通して考察した。ここから、以下のような理解が導かれる。

まず、魂は原始に、理性的被造物として神の似像性を有するものとして、定数だけ創造された。その魂は自由であったがゆえに、その自由を怠慢によって用い、神から離れることとなった。この墮落した存在を魂と呼ぶ。神はこの魂を教育するために、身体を伴う世界を創られた。この世は多々ある世界のひとつであり、それらの世界を生きるなかで、魂は訓練を受ける。この世での生を終えた者たちは、復活し、再び身体を与えられ、審判の前に立つ。この審判のもと、魂はそれぞれの状況に応じて苦痛を味わう。しかしこの苦痛は懲罰としてではなく、魂を浄化するためである。そして最終的に、神は自らの意志によって万物を救済される。

『民数記講話』のなかでは、魂の道程を四十二段階をもって述べていることも指摘される。

(79) PA II, 10, 7 (Görgemanns-Karpp181, 14-17): "...pars eius melior illa dicitur, quae postmodum per libri arbitrii lapsus contra naturam primae conditionis et puritatis adsumpta est,...".

この魂は上下部からなり、最も上部にはヘーゲモニコンが位置し、それはすなわち理性であり、知性であり、魂に墮落する前のヌースである。それは良心とも換言できる⁽⁸¹⁾。そこは自由意志の場であり、ロゴスと出会い、また祈る器官でもある。

しかし、たとえばオリゲネスは、「長い間不毛であった魂らも、自らのヘーゲモニコンの不妊症と自らのヌースの不毛を自覚することで、・・・」⁽⁸²⁾と、ヘーゲモニコンとヌースについて、互いに別のものとして、しかもそれらが不完全な状態であり得ることを表している。さらに、ヌースは「墮落するもの」⁽⁸³⁾としても述べられている。これらは、ヌースが魂の墮落以前の完全な状態として理解されていたことと一致しない。

これについては、ヘーゲモニコンが自由意志ゆえに動揺するものであると指摘されている点から考え得るのではないか⁽⁸⁴⁾。たとえば、善も悪も選び得るとしたらそこには自由が存在するが、しかしそのとき、本当に自由であるならば、あえて悪を選ぶ必然性には縛られてはいないはずである。つまり、あえて悪を選ぶかぎり、それは自由とは言えないのではないかという問が浮上するのである。

しかし前者の場合が選択の自由であるのに対し、後者は悪からの自由すなわち解放のことを指すという観点から見たならば、逆に、悪を選ぶ必然性のなさゆえに善しか選び得ないとき、それは悪からは自由であってもそこに意志の自由はないことになる。つまり、ヘーゲモニコンが自由意志を持つためには、そこに、悪を選ぶ可能性が含まれていなければならないのである。そのような可能性のもとでこそ、墮ちた魂は自らによって善を選ぶことを学び、その学びの結果、再び本来の自己、ヌースに近づくことができるのである。

以上のように、魂は神の性質を保有しながらも、与えられた自由意志のゆえに神から離反し、そこからの回復のためにこの世で生きるが、それは同時に、この世が常に選択の機会であることを意味している。そして、人間の心の中に様々な要素が働くなか、知恵であり理性であり神の本質であるヘーゲモニコンの働きに焦点を当て、それに魂自らを教導させることの必要性を、オリゲネスの叙述に理解することができるのではないか。

(80) T.Mikoda, op.cit., pp.459-463.

(81) PA II, 10, 4 (Görgemanns-Karpp 178, 3-4).

(82) PE13, 3 (GCS3, 327, 6-8): "ἀγονοί τε γὰρ ἐπὶ πολὺ γεγεννημένοι ψυχαί, ἡσθημένοι τῆς στεριώσεως τῶν ἰδίων ἡγεμονικῶν καὶ τῆς ἀγωνίας τοῦ νοῦ ἑαυτῶν, ...".

(83) PE29, 12 (GCS3, 387, 13-14): "ἀκόκμιος νοῦς". Cf. Rom.1, 28.

(84) T.Mikoda, op.cit., pp.459-463.